

II-2 研修・指導と教育

埋蔵文化財センターの研修と指導

1999年度には、主に地方公共団体の埋蔵文化財保護行政担当者を対象にして、下記一覧表の研修を実施した。また、右段の遺跡・建造物等について、調査もしくは整備・修復の指導・協力を行った。(沢田正昭)

| 区分 | 課程 | 内容 | 担当室 | 実施期日 | 研修日数 | 研修人数 |
|----------|-----------|---|---------|--------------|------|------|
| 一般 研修 | 一般課程 | 遺跡の発掘調査を進めるために必要な基礎的知識と技術の研修 | 研究指導部 | 6月15日～7月15日 | 31 | 23 |
| | 保存科学課程 | 遺物の保存に関する保存科学的な専門的知識と技術の研修 | 遺物処理研究室 | 7月22日～8月5日 | 15 | 17 |
| | 文化財写真課程 | 埋蔵文化財の写真撮影等に関して必要な専門的知識と技術の研修 | 情報資料室 | 8月17日～9月14日 | 29 | 17 |
| | 専門 | 外注管理に必要な測量基礎の実習と仕様書の作成などに必要な専門的知識の研修 | 測量研究室 | 9月21日～10月5日 | 15 | 9 |
| | 環境考古課程 | 古環境復原研究のために必要な専門的知識と技術の研修 | 発掘技術研究室 | 10月12日～11月2日 | 22 | 11 |
| | 遺跡保存整備課程 | 遺跡の保存整備に関して必要な専門的知識と技術の研修 | 保存工芸研究室 | 11月9日～12月2日 | 24 | 13 |
| | 官衙遺跡調査課程 | 官衙遺跡の調査研究に関して必要な専門的知識と技術の研修 | 集落遺跡研究室 | 12月8日～12月21日 | 14 | 21 |
| | 報告書作成課程 | 見やすく読みやすい報告書の作り方と、図録・学術誌編集の基礎に関する研修 | 考古計画研究室 | 1月12日～1月21日 | 10 | 28 |
| | 城郭遺跡調査課程 | 城郭跡の調査・修復に必要な専門的知識と技術の研修 | 保存工芸研究室 | 2月7日～2月18日 | 12 | 28 |
| | 埋蔵文化財基礎課程 | 埋蔵文化財行政を担当する上で必要な遺跡・遺物に関する基礎的知識の研修 | 発掘技術研究室 | 6月1日～6月9日 | 9 | 31 |
| 特別 研修 | 信仰関連調査課程 | 考古学から宗教を復原するために必要な専門的知識と学問的手続を研修 | 考古計画研究室 | 5月11日～5月14日 | 4 | 30 |
| | 遺跡地図情報課程 | 埋蔵文化財の調査研究へのGISの応用に関する基礎的知識の研修 | 情報資料室 | 1月27日～2月1日 | 6 | 30 |
| | 生産遺跡調査課程 | 生産遺跡の調査法と、その成果をもとにした工房復原の手順・方法を学ぶ研修 | 考古計画研究室 | 2月24日～2月29日 | 6 | 21 |
| | 写真測量課程 | 写真測量による地形図及び遺構図の作成を外部委託するために必要な基礎的知識の研修 | 測量研究室 | 3月6日～3月8日 | 3 | 17 |
| | 荘園遺跡調査課程 | 荘園遺跡の調査研究に関して必要な専門的知識と技術の研修 | 集落遺跡研究室 | 3月14日～3月17日 | 4 | 18 |

日本各地の遺跡・建造物等に関する指導・協力一覧

福山城・フゴッペ洞窟・北黄金貝塚・常呂町史跡・カリンバ三遺跡(北海道)、須恵器窯跡群・三内丸山遺跡・川崎遺跡・総合運動公園遺跡ゾーン(青森県)、御所野遺跡・柳之御所遺跡・盛岡城跡(岩手県)、多賀城跡(宮城県)、伊勢堂岱遺跡・大湯環状列石(秋田県)、宮畑遺跡・上人壇廢寺跡・根岸遺跡(福島県)、平沢官衙遺跡(茨城県)、飛山城跡・那須官衙関連遺跡・樺崎寺跡・下野国分寺跡・上神主茂原遺跡(栃木県)、県立歴史博物館展示(新潟県)、桜町遺跡(富山県)、吉崎次場遺跡・真脇遺跡・七尾城跡(石川県)、後瀬山城跡・一乗谷朝倉氏遺跡(福井県)、江馬氏城館跡・前波三ツ塚古墳群・美濃国府跡・昼飯大塚古墳・苗木城跡(岐阜県)、史跡考古資料・新居関跡・登呂遺跡・片山廢寺跡・藤枝市史編さん・巴川出土丸木舟・横須賀城跡・賤機山古墳・恒武遺跡・長浜城跡・県指定文化財(静岡県)、小牧山・小長曾陶器窯跡・三河国分尼寺跡(愛知県)、上野遺跡・宝塚古墳(三重県)、近江国庁跡・兵主神社庭園・大岩山古墳群・光相寺遺跡・青江遺跡・安土城跡・野路小野山製鉄遺跡・粟津湖底遺跡(滋賀県)、佐山尼垣外遺跡出土獣骨・恭仁宮跡・賀茂御祖神社・方廣寺跡(京都府)、堺市土塔・池上曾根遺跡・長原瓜破遺跡・今城塚古墳・新堂廢寺(大阪府)、新宮宮内遺跡・市辺遺跡・加古川市文化財・外野柳遺跡・上沢遺跡・兵庫津遺跡・神戸市文化財・赤穂城跡二の丸錦帯池跡・西条古墳群史跡(兵庫県)、藤ノ木古墳・酒船石遺跡(奈良県)、上淀廢寺跡出土壁画塑像・岡益廢寺跡・上原遺跡・青谷上寺地遺跡・栃本廢寺塔跡・妻木晩田遺跡・大御堂廢寺(鳥取県)、荒島古墳群・出雲大社境内遺跡・八雲立つ風土記の丘地内遺跡・三瓶埋没林・加茂岩倉遺跡銅鐸・石見銀山遺跡・出雲国府跡(島根県)、浄土寺庭園・冠遺跡群・安芸国分寺跡・府中市埋蔵文化財(広島県)、大内氏館跡・小野田セメント徳利窯(山口県)、阿波国分尼寺跡(徳島県)、有岡古墳群・宗吉瓦窯跡(香川県)、阿方矢田遺跡・來住廢寺跡・河後森城跡・宇和島城跡(愛媛県)、大宰府跡・三沢公家隅遺跡(福岡県)、歴史資料館・佐賀城公園歴史の森(佐賀県)、勝本町双六古墳・金石城跡・原の辻遺跡・原城跡(長崎県)、宇土城跡・大村横穴群(熊本県)、臼杵磨崖仏・緒方宮追東西石仏・亀塚古墳・中安遺跡(大分県)、日向国衙跡・蓮ヶ池横穴群・大島島田遺跡(宮崎県)、清水磨崖仏・山ノ脇遺跡・西田橋解体復元(鹿児島県)、那覇市新都心整備事業資料整理調査報告書作成・斎場御嶽・首里城公園守礼門地区出土金属製品(沖縄県)

今年度研修の特色

埋文センターが平成11年度に行った研修は16本。例年は14本程度だから、やや張り切り過ぎ。そのため異動など自治体が落ち着いた連休明け、5月11日の信仰関連遺跡調査課程から3月17日終了の荘園遺跡調査課程まで、びっしり。「信仰」で始まり終了が「荘園」とあって、出発「信仰」!、荘園で「終焉」と落ちまでついた。

冗談はさておき、11年度の研修は10年度に続いて研修の入れ替えが少しだが進んだ。自治体の多くが企業に外注している遺跡測量など、必要性が薄れた課程を休止。代わりに外注する際の仕様書や、施工管理に必要な事項の習得を目的とした、写真測量外注管理課程や遺跡地図情報課程など、3・4日の短期研修を加えた。これらは概ね好評であった。短期がそれなりに好評だった理由は、いまひとつ。長引く不況の影響である。

「一週間以上の出張はだめ、と言われているので。来年は、来れないと思います」ある財団埋文の若手の言葉である。原因者負担の調査が激減し、とても研修どころでなく、この出張が「手切れ金」とか?

厳しい状況でも研修に参加してもらうには、魅力ある課程を企画するのが一番である。いま、多くの自治体埋文職員の課題は、保存整備にこぎつめた遺跡の有効活用であろう。これは個々の遺跡に止まらず、周辺の遺跡、景観などを含めた地域計画の策定と、実行である。それを具体的にどう立てるのか、今後の経費は、そして、なにより理念は・・・。

これは自治体の埋文職員だけでなく、首長さんにとっては焦眉の急のこと。わが埋文も、従来の寺院官衙遺跡調査や遺跡保存整備など、発掘調査や保存整備「技術」の修得にとどまらず、調査・保存・整備した遺跡などを地域社会のなかで活かす、総合的な「文化遺産活用課程」といったプログラムを真剣に考えなければならぬだろう。

平成10年度にいろいろあった一般研修は、やはり若者が大半をしめた。「過去の歴史」に鑑み、現今の若者にも理解しうる研修内容と、勤務時間の遵守などを心懸けた。とはいえ、限られた時間内に精一杯の知識、経験を伝えることはなかなか難しい。センターに課された宿題は多い。(金子裕之)

京都大学大学院の教育

京都大学大学院の人間・環境学研究科、文化・地域環境学専攻(第2専攻)環境保全発展論講座内に客員分野が設置されてから6年が過ぎた。授業科目は、住環境保全論(山中敏史・浅川滋男)・考古環境学論(田辺征夫)・文化財保存科学論(沢田正昭)・文化財保存調査法論(光谷拓実・松井章)の4教科、6名の陣容で進めている。奈良国立文化財研究所だからこそその学際的で多様な資料と、文化財研究にふさわしい設備をふんだんに活用した、独特の講座を展開することに努めてきた。

平成11年度までにカンボジアからの留学生1名を含む9名の学生が修了、単位取得退学している。彼らの主な就職先には、建設省、東京国立博物館、奈文研などがある。さらに、非常勤職員として地方自治体の埋蔵文化財関係機関等に就職し、活躍している。学生の研究課題が専門的に過ぎるきらいもあるが、それ故に即、職場の実戦部隊として活躍できる利点もある。じっくりと研究させることと、即戦力となるように育てることとのバランスをどのようにし向けていくかが、今後の我々の課題となりそうである。文化財教育は、まだ緒についたところと言ってもいい現状にある一方で、文化財関連の学科や講座を設置する大学が増えつつある。いわゆる「文化財学」が急進することは明白である。(沢田正昭)

奈良女子大学大学院の教育

1999年度から奈文研では新たに、奈良女子大学と提携し、同大学大学院人間文化研究科博士後期課程比較文化学専攻文化史論講座の教育研究を担当することになった。具体的には金子裕之・館野和己・花谷浩の3名が、教授・助教授を併任し、研究所で学生の教育指導にあたった。金子は宗教考古学特論を担当し、古代都城に特有な都宮祭祀の諸相と形成過程について、都城の発展段階から検討を行った。館野は歴史資料論で、平城宮跡出土木簡を実物にあたりながら再積読し、かつ内容の検討を行い、花谷は歴史考古学特論で、発掘遺構・遺物と文献史料に基づいて、飛鳥地域の古代寺院の成立と展開をたどり、古代国家成立過程を考えた。(館野和己)